

出会いはタカラモノ

子どもから教えられたことばかり

第8回 ねがいが高まり自ら変わる



佐藤比呂二

さとう ひろじ／東京都生まれ。特別支援学校教員。編著書に『ホントのねがいをつかむ—自閉症児を育む実践』（全障研出版部）など。

パニックになりママに掴みかかる

「先生。今すぐ来られないでしょうか？」

切羽詰まったレイ君ママからの電話に、私はすぐに車の鍵を手に取りました。レイ君の家までは車で15分。到着するとパニックはすでにおさまり、ホッとした表情のママの姿がありました。これはレイ君（自閉症、知的障害）が高校3年生のときの出来事です。激しいパニックになったレイ君に掴みかかれ、ママは仕方なく車に避難し電話をかけてきたのでした。レイ君は私を見るなり乗り物図鑑を開き「化学消防車（の絵を描いて）！」とリクエストします。これが二人の「お絵かきタイム」です。

出会いは彼が中学1年のとき。休み時間に絵の得意な先生に自分の好きな乗り物を描いてもらうのが楽しみで、私も何度か「絵描き人」として選ばれる栄誉を賜りました。この時

間を「お絵かきタイム」と名付けることで、「佐藤先生、お絵かきタイム！」とスムーズに要求できるようになりました。

予定を決めて過ごす

穏やかな性格のレイ君は、遊んでいる物を友だちに奪われても取り返すことができず、隅っこで大切にしている本を静かにビリビリと破いているような子でした。先生の指示に素直に従うものの、イヤなことも拒否できずストレスをためこみ、ときに窓を開けて大声で叫ぶことがありました。

スケジュールにこだわり時間割や行事のチェックを欠かさず、家でも予定を決めて過ごしていました。たとえば、土曜日は図書館と電気屋さんに行く日、毎月第2日曜日はパパと青梅鉄道公園に行き決まったお店でハンバーグを食べる日：などです。そして、その予定のなかに、「第3土曜日はママに被害をする日」が含まれていました。大好きなママだから

こそ、普段がんばりすぎてため込んでしまったストレスをぶつけていたのでしょう。人間関係の幅が狭く、特定の人と深い関係にある場合、他害はその人に向かいがちです。

レイ君を愛してやまないママは、「月に1回のことから」とその日は噛まれるのも覚悟で、夏でも厚手の服を着るなどして受け止めてきました。

しかし、ママから幼い頃の話をかかると「月に1回」どころではない想像を絶するエピソードが次々に出てきました。

突き刺さる他人の目

1歳前からママへの噛みつきやひっかかりが続き、3歳のときの精神科相談では、目の下に隈をつくり噛み傷だらけのママの姿をみた医師から「お母さん、あなたが入院しなさい」と言われたそうです。

幼児期から小学校低学年の頃は、頻繁に家を出て行方不明になったレイ君。自転車に乗れるようになると、一人で出かけてしまいい見つけたときは素っ裸で服も自転車も見つからず、何度も警察のお世話になりましたとママは振り返ります。買い物に行けば品物を投げまくり、病院の待合室では長椅子をひっくり返す。電車を見に連れて行けば終電まで帰らず、近所で引越しがあれば降りしきる雪の中でも終わるまで見届けなければ気がすまない。そんなレイ君にいつも寄り添ってきたママ。

そうした日々のなか、一番つらかったのは、他人の目だったそうです。レイ君を指さし、「言うこと聞かないとあんな

子になるよ」とわが子に言う母親。氷の張った川に入っ

てしまったときや、道路の真ん中で寝転がるのを止めるために体を押さえつけていると、「虐待だ！ 警察を呼ぶぞ！」と言われ、自閉症について説明しても、「家の柱に縛り付けておけ！」と怒鳴られ絶望的な気持ちになったそうです。

飛び出しが多いのだから家に鍵をかけるよう助言する人もいましたが、「鍵がなくても出かけない」ことを学べるよう鍵は使いませんでした。決してダメと言わず、かといってなんでもいいではなく、走り回ったら「歩きましょう」、噛まれたら「やさしくしてね」といつも肯定的な言葉がけをママはしてきたのです。

知ってもらい、わかってもらう

ママはレイ君のことを理解してもらおうとスーパーや交番にも説明してまわりました。すると、スーパーではほうきや雑巾を用意してくれ、買い物の後「お疲れさま」とお茶を出してくれたこともあるそうです。図書館で借りた本を壊してしまうので司書さんが「壊れそうな本は隠しましょうか」と言ってくれたり、勝手に人の自転車に乗っていくのも悪気はないことをおまわりさんもわかってくれたり、周囲の理解が広がっていききました。ママの努力に頭が下がります。一方で、ここまでしなければいけない事実には、障害に対する理解を広げる必要性を感じます。当時を振り返り、ママが心に残るエピソードを教えてくださいました。

「その頃、歯科医院の待合室に置いてあるお気に入りの本